Open Access Japan : 学術情報流通の改善を目指して

三根 慎二*

慶應義塾大学大学院文学研究科

I. 学術情報流通の電子化とオープンアクセス

電子ジャーナルに象徴される学術情報流通の電子化は今もなお進行中であるが、学術雑誌は依然として学術情報流通において中心的役割を果たしており、研究者、学会・商業出版社、大学図書館の四者を經由して流通している。学術情報基盤として大学図書館が電子ジャーナルに対するアクセスをいかに継続的に提供するかは今後も重要な課題である。国公立大学図書館それぞれが商業出版社とコンソーシアム契約を結ぶなど対応策をとっている。

さらに、こうした動向と並行して、近年オープンアクセスと呼ばれる一連の運動が大きな関心を集めているのは周知の通りである。電子情報環境下での学術情報流通において大学図書館はどのような役割を果たすべきなのか、改めて問い直さざるを得ないだけの強いインパクトを持つまでになっている。これまで学術情報流通に直接関与することがなかった政府や研究助成機関が極めて影響力の強い利害関係者になるなど、オープンアクセスがもたらす変化は伝統的な学術情報流通の枠組みを根本的に変容させるものである。学術情報流通の要である学術雑誌を研究者・学生に提供、保存してきた大学図書館は、オープンアクセスを対岸の出来事として傍観するのではなく、当事者として積極的に情報を収集し、具体的な成果を目に見える形で利用者そして社会全体に還元する必要があるのではないのか。

II. Open Access Japan 設立経緯と実態

1. 設立経緯

本サイト Open Access Japan¹⁾ (以下 OAJ とする) は、二つの科学研究費補助金の研究プロジェクト—慶應義塾大学の倉田敬子教授が研究代表者である「オープンアクセス状況下における学術情報流通変容の総合的研究」と

千葉大学の土屋俊教授が研究代表者として実施している「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」—による共同プロジェクトである。OAJ は両者から助言を受ける形で、筆者が基本的に運営管理を行っている²⁾。2005年2月に仮運営開始、同年5月一般公開し、現在に至っている。

先に述べたように、学術情報流通の電子化およびオープンアクセス運動の高まりは多くの利害関係者の関心を生み、日々多くの情報がウェブログ、新聞、学術雑誌などに流通しているが、その多くは英語で提供されている。日本においても関係者の関心を今以上に高め、議論の下地となるような情報の提供や交換を活発にするためには、日本語による国内外の情報を伝える開かれた場が必要であると考えた。こうした問題意識は両研究グループに共通のものとしてあり、OAJ という形で現実のものとなった (図1)。

図1. Open Access Japan のトップページ

*Shinji MINE : 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45.

mine@slis.keio.ac.jp

(2006年7月15日 受理)

2. 提供内容

上記の目的のもと、OAJ は日本におけるオープンアクセス・機関リポジトリのポータルサイトであるべきであると考え、提供する内容は、1) 速報性の高い事柄やニュースおよび動向の紹介と、2) 資料性の高い文献や Web ページに大別される。比重は前者にあるが、後者についても追加すべきものが発見され次第、適宜追加するようにしている。情報源は、Peter Suber 氏が運営している Open Access News³⁾ をはじめとして、オープンアクセスや機関リポジトリ関連のメーリングリストであり、そこで流れる情報から日本の閲覧者にも関心と呼びそうなトピックをピックアップして提供するようにしている。

3. 提供形式

オープンアクセスに関連する情報は、毎日必ず何かしら発表されている。そのため、更新や管理が比較的容易であるウェブログで有名な Six Apart 社の MovableType を利用している。平成18年度情報通信白書によれば、2006年3月当時で日本のブログ登録者数は約868万人に達している⁴⁾。研究者や図書館員が公開しているウェブログも多く、閲覧者はそれ以上であるのは想像に難くない。RSS (Really Simple Syndication) による記事の配信もしており、RSS リーダに登録することによって閲覧することも可能である。はてなブックマークにも容易に登録できるようになっている。

ウェブログの大きな特徴は、コメントとトラックバックにあるが、これらの機能によって、OAJ の閲覧者が気になった記事に対して意見を投稿したり、別のウェブログの運営者が明示的にリンクを張ったりすることが自由にできる。コメントの投稿時には、メールアドレスを入力する必要があるが、必ずしも実在するアドレスである必要はなく匿名で投稿することもできる。

4. 記事内容

OAJ では、オープンアクセスや学術情報流通に関連する国内外の話題や文献をできるだけ広く網羅できるように努めている。主要なコンテンツは、速報性の高い出来事を、1) ニュース、2) 出版社、3) 動向紹介、4) 図書館、5) 大学・研究機関、6) 学協会、7) 学術雑誌、8) 政府、9) 文献、10) 機関リポジトリ、11) 研究助成機関といったカテゴリに分類する形で紹介している。2006年7月時点で、総記事数は180件で、寄せられたコメントとトラックバックはそれぞれ57件、5件である。現在では、筆者

がカバーできない情報や背景知識、ニュース記事の補足情報などを閲覧者がコメントやトラックバックとして補足する形で、速報性だけでなく幅の広い情報の提供も可能になっている。

5. その他の情報源

日々更新されるニュース性の高いコンテンツだけではなく、参考資料として年表、日本人研究者による発表資料、翻訳資料、書誌も提供している。

年表には、日本と海外におけるオープンアクセス関連の重要事件や項目を1989年から時系列でまとめており、Web 上に関連する資料やホームページがある場合には、リンクを張っている。

日本人研究者による発表資料では、両プロジェクトのメンバーによるオープンアクセスおよび機関リポジトリ関連のプレゼンテーションの資料が列挙されている。OAJ でのみ公開している資料も多数あるので、様々なテーマについて概略を知るには有益な資料となっている。

翻訳資料では、海外のマスメディアや学術雑誌などに発表されたオープンアクセス関連の記事や論文を適宜日本語に翻訳し、ウェブログの記事では触れることができなかった情報を提供している。2006年7月時点で、約40件の翻訳記事を提供している。

書誌は、日本語で書かれたオープンアクセスおよび機関リポジトリ関連の書籍、学術雑誌、新聞記事、Web 上の資料などをほぼ網羅している。オープンアクセスについて調べる際には、日本語文献については参照すべき文献の出発点として利用できる。

6. 利用状況

このように運営されている OAJ であるが、どの程度利用されているのか、アクセスログを元に振り返ってみたい。2005年5月の公開から一年間のアクセス状況を示したのが、図2である。2006年6月当時では、OAJ への総訪問者数は月2万以上、総ヒット数 (OAJ サイト内での総アクセス数。検索、別記事への移動などすべての動作を1としてカウント) は9万件以上になっており、公開から日を重ねるごとに右肩上がりでも多くの方々に利用されていることがわかる。

どのような人たちが OAJ を閲覧しているのか、アクセス元の IP アドレスから類推すると、当然ながら大学関係者が最も多い。特に、国立大学からのアクセスが大半を占めており、その中でもすでに機関リポジトリを構

築しているあるいは構築中の大学からのアクセス数が多く、これらの大学図書館からのものと思われる。その他にも、国内の研究所、図書館、書店、一般企業からも多くのアクセスを集めているようである。日本以外にも、アメリカをはじめとして海外からのアクセスも増えてきている。

参照元リンクから OAJ にリンクを張っていただいているサイトを見ると、機関リポジトリや大学図書館のウェブサイトを始めとして、図書館員、研究者、出版社と思われる方たちが運営しているホームページやウェブログからのリンクが多い。特に、図書館情報学以外の分野の研究者が開設しているホームページやウェブログからのリンクがあることは、日本においても少数ながらもこの問題に関心を寄せている研究者が存在していることを証明している。そうした研究者のホームページやウェブログは、オープンアクセスに対する研究者の意見や考え方を知ることができるため、非常に有益である。

アクセス数から、人気コンテンツの上位10件を見ると、公開期間が長いものが当然上位に来ているが、オープンアクセスという理念を簡潔に説明した「オープンアクセスとは」、先述した「オープンアクセス機関リポジトリ関連文献」、日本の機関リポジトリのリストである「日本における機関リポジトリ」など基礎的な情報を提供するページが多くのアクセスを集めている。他にも、発表資料である加藤信哉「オープン・アクセスの概要と最新状況」や倉田敬子「オープン・アクセスは何をもたらすのか? : 学術情報流通における図書館の役割」が頻繁に利用されている。

先述したような設立経緯のもと始まった OAJ であるが、現在では比較的多くの関係者に情報源として認知され閲覧されているようであり、当初の目的は果たしつつある。

Ⅲ. 今後の動向

最近の動向を簡単に紹介すると、米国国立衛生研究所（以下 NIH とする）によるパブリックアクセス方針を強化する動きや上院議員の John Cornyn 氏と Joseph Lieberman 氏による「Federal Research Public Access Act of 2006」の提出、英国における Research Councils のオープンアクセス方針など、政府レベルでの動きが再び高まりを見せつつある。日本でも、2005年度には国立情報学研究所による「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業」（CSI 事業）により、委託された19大学によって機関リポジトリの構築が行われた。2006年度も CSI 事業は継続され、57大学での運営構築が予定されている。数年後には機関リポジトリの設置数で、日本は世界でも上位国になる可能性があり、オープンアクセスを推進する上での基盤整備が進むことになる。

今後数年はオープンアクセス関連の動向はさらに活況を見せることは疑いようがなく、OAJ ではこうした国内外での重要事項について紹介を続けるとともに、より充実した内容を日本の閲覧者に提供できるように一層努力していくつもりである。たとえば、単なる事実の紹介だけにとどまるのではなく、その背景や日本の状況をもふまえた形で解説することや、外部の研究者・専門家に記事の執筆を依頼するなどが考えられるだろう。

図2. Open Access Japan の利用状況

IV. おわりに 医学図書館員とオープンアクセス

オープンアクセスと医学情報とは、他の分野に比べても非常に関連が高い。PubMed Central, Public Library of Science によるボイコットと PLoS Biology に代表される刊行誌⁵⁾、NIH のパブリックアクセス方針、Wellcome Trust による UKPMC (UK version of PubMed Central) の設立計画など、オープンアクセスを考える上で影響力が大きい出来事には医学分野が関わっていることが多い。そのためか、米国の医学図書館のホームページには、研究者向けに NIH のパブリックアクセス方針を解説したページを設けるなど、学術コミュニケーションの最新ニュースを積極的に提供しているところも少なくない。これに比べると管見の限りでは、日本の医学図書館のホームページではオープンアクセスについての情報提供があまり行われていないように思われる。たとえば、OAJ をホームページのリンク集に加えたり、「オープンアクセスとは」などにリンクを張って医学図書館としてオープンアクセスの情報提供を行ってはどうだろうか。

オープンアクセスを新たな危機として恐れるのではなく、大学図書館の役割をとらえ直しアピールする機会となるよう、今後も OAJ はオープンアクセスに関する最新情報への仲介役となることを目的として運営していく所存であり、閲覧者からのフィードバックをサイトに反映していきたいと思っている。そのためには、医学図書館と OAJ との協同が必要であり、ご支援いただけるようお願いして本稿の終わりとしたい。

引用文献

- 1) Open Access Japan | オープンアクセスジャパン[internet]. <http://www.openaccessjapan.com> [accessed 2006-7-25]
- 2) Open Access Japanの創設にあたって[internet]. <http://www.openaccessjapan.com/about.html> [accessed 2006-7-25]
- 3) Open Access News[internet]. <http://www.earlham.edu/~peters/fos/fosblog.html> [accessed 2006-7-25]
- 4) 平成 18 年度情報通信白書[internet]. <http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h18/html/i1510000.html> [accessed 2006-7-25]
- 5) 田中久徳. Public Library of Science (PLoS) の試み. カレントアウェアネス 2001;267:3-4.

Open Access Japan: Towards Improvement of Scholarly Communication

Shinji MINE

Graduate School of Library and Information Science, Keio University. 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345, Japan

Abstract: This article introduces the portal site for the Open Access (OA) movement of Open Access Japan. The foundation, contents and usage of the Open Access Japan, along with actual data are described. OA has been changing rapidly in the world; thus, the Japanese medical library community must

cooperate with Open Access Japan to deal with this movement.

Key words: Scholarly Communication; Homepage; Open Access; Medical Library
(*Jgaku Toshokan* 2006;53(3):300-303)